目が覚めると、ぼくはここにいた。ぎしぎしときしむベッドの上に、横たわっている。ぼんやりと天井が見えている。さほど大きな部屋ではなさそうだが、がらんとしていて、殺風景だ。

ここがどこだか、いつからいるのか、わからない。ぼくはだれだろう。自分の名前を思い出せない。

でも、頭を強く打ったわけではなさそうだ。痛くもかゆくもないし、思考は問題なくできる。物の名前も知っている。自分のことや、なぜここにいるのかを、ちょっと思い出せないだけだ。

首をまわして見ると、ベッドの横に、小さな四角いテーブルがあった。上には眼鏡が置いてある。そう、これは眼鏡と言うものだ。

「メガネ」

自分の声が思いのほか低くて、驚く。

ぼくは起き上がってその眼鏡をかけた。すると、すべてが明快になった。もやもやとしていた霧は消え去り、代わりに、すべてのものの輪郭が浮かびあがった。

小さな窓がある。ベッドの下に置いてあったサンダルをはいて、数歩歩いて窓の外を見る。そこには、これまた見覚えのない景色が広がっている。向かい側の建物の上の空はどんよりとしていて、太陽も雲も見えない。いや、よく見れば、空ではない。天井だ。どうやら、巨大なドームの